

北九州市の文化財を守る会

会報

No. 48 59. 7. 20

発行 北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区鍛冶町一丁目7-2
森鷗外旧居内
電話 (093) 531-1604
印刷 コトブキ印刷
北九州市小倉北区昭和町15-1
電話 (093) 931-6191



木造二階建て天然スレート葺き、外壁のハーフ・チンパリの木組みは太くダイナミックな構成で、正面に大小五つの切妻屋根が並んだ堂々たる建物である。
アインシュタイン夫妻が来日するときここに泊った。

門鉄会館 門司区谷町一八

「ふるさと」再生

「ふるさととは遠くにおいておもうもの、そしてかなしくうたうもの、よしや」と室生犀星は詠った。遠く離れても「ふるさと」を否定し、忘却の箱の中に蔵してしまふことはできない。少年の、そして青年の日々を育ぐんだ「ふるさと」、犀星にとって、まさに自己形成の基底になるものであった。だからそれは「かなしくうたうもの」であり、人はその想念の基底から脱することができない。
「ふるさと」のイメージは、「自然環境」と、「人間の教習によって創造され蓄積された造形」と、「生活習俗」が一体となって凝結し形づくられた生活文化、とわたしは考えている。だから「ふるさと」は人間形成の基調にもなる。そこに住み、住んだ人びとに対して、なんらかの印象を与えずには措かない。「ふるさと」を構成する生活文化は、多くの文化財を内蔵している。わたしたちが生活するこの北九州も、数多くの文化財を持っている。それらは何千年も前からの人びとの生活文化をもがたり実証して呉れる。過去のすべての積み重ねの上に現在があり、この現在の中から明日の北九州の文化が芽生えてゆく。
「ふるさと」を「よし」とする願望は誰もが持っている。しかしながら、特にこの数十年來の開発は、「ふるさと」喪失に向って進んだ。文化財の中で、動かせるものは博物館や美術館に収納できるが、動かすことのできない建造物は、次ぎつぎに失われていった。北九州発展の歴史をものがたり、人びとの生活の中で一体化した由緒ある建造物の喪失は、もうこの辺でストップをかけねばいけない。建造物は「ふるさと」北九州を構成する重要な核である。この核と周辺との整備によって、再び「ふるさと」を取り戻さねばならない。これは緊急に必要なことである。しかもなお一歩を進めて、整備をするだけでなく、日常生活の中で、市民の集会や催し、あるいは散策や憩いの場として利用が考えられるならば、それは潤いのある情緒ゆたかな「ふるさと」の実現となる。
このためには、市民の一人ひとりが、誇るべき郷土、ほんとうに任みよしい郷土をつくるために、「ふるさと」再生に取り組むべきときである。そこから北九州の地域に根づいた、明日の文化が芽生えてゆく。とくに行政当局の深い認識を要望する。(米津三郎)

北九州市内に現存する主な洋風建築リスト (明治から戦前まで)

注意:見学にあたっては、あらかじめ許可を得ることが望ましい。

Table with columns: 区 (District), 建物名 (Building Name), 所在地 (Location), 建設年代 (Construction Year), 構造概要 (Structural Summary), 設計者 (Designer), 施工者 (Builder), 備考 (Remarks). Rows include buildings like 部崎燈台, 松庫ビル, 門司港駅舎, etc.

西日本工業大学教授 中村雄三 作成
西日本工業大学教務部 村頭 都

編集後記

今号の編集は戸畑支部の担当であったが、中村雄三先生の手によって市内の建築物調査が一段落をしたこともあって、その成果の一部を会員に披露のため編集を本で行うことにした。貴重な写真も豊富に取り入れ、見るだけでも楽しく、またたいへん参考になるものと思う。
同時に、これら建築物が北九州の近代的発展の過程を物語るだけでなく、建築技術の面からも勝れたものであり、深く考えさせられるものがある。本号は建築物特集になったが、北九州市という都市とこれら建築物の保存は、これらにちかおける重要な課題として位置づけられるものである。市民の間から広範に力強く盛りあがる志向によって、文化財は守られるものであり、それが北九州の文化水準の指標ともなるものである。
行政当局の積極的な取り組みはもちろん必要であるが、市民としてもイギリスのナショナルトラストやシンピクトラストのようなものを考えねばならない時期に来ていると痛感される。(米津記)



# 景観と建築

街並みデザイン委員会  
会長 神崎義夫

都市にとって景観が注目され、政策として重要視されてきたことは比較的新しい。

その背景としては、二つの状況がある。一つは、戦後の高度経済成長過程で、産業、交通の発展が都市の開発を急進に進めたことである。都市の経済機能を強めるために、破壊と建設が同時進行した。そのために、街の様相は近代化の名のもとに大きく変ぼうした。二つは、時期的には経済の低成長への転機からである。大きいもの、新しいものへの讚美から価値観が変り、質的なもの、伝統的なものへの見直しである。いわゆる「ハードからソフトへ」という指向が、政府から地方自治体にも政策にとりいれられてきた。

すなわち、都市を住民の眼から見て「住み良さ」「魅力」などに加えて、自分の街という個性を創り出す考えである。北九州市の場合、いち早くこの視点から「都市景観審議会」が設けられ、その答申が五十七年三月に行われた。国内の都市では早い取り組みである。

すでにこの答申に基づき、具体的な都市景観づくりの施策が行われている。都市の緑化・彫刻のある街づくり、みどりの歩道、優良建築の表彰、公共建築設計に文化

性、歴史建造物の保全など、多面的に広く景観づくりが展開されている。

そして、これら都市景観の総合的施策の推進には、市から委嘱を受けた「街並みデザイン委員会」によって、そのガイドラインおよび景観条例について研究が進められている。

そこで、都市景観を考える場合、最も具体的に、そして分り易く、さらに景観の核になるのが建築物である。

どの都市でも、そのシンボルとして、あるいは観光資源の主役にされているのに、歴史的建造物が多い。「名古屋は城でもつ」の表現は象徴的であった。北九州市の場合でもそのシンボルの建造物には、小倉城が常に上位にあげられている。

新しい建物についても、優良建築物などのように、都市景観の核としての重要性は当然配慮されるべきである。

しかし当面緊急なことは、せっかく市民が受けついできている文化遺産としての歴史的建造物を守ることであり、すでに国指定重要文化財の「西日本工業倶楽部」や、北九州市指定文化財の「史跡・森鷗外旧居」などは、北九州市の文化的風土の醸成に大きな役割

を果たしている。

社・寺などは、まだ地域社会に支えられて、それなりに守られているが、最も破壊・損耗の危機にさらされているのが、都市史の語り手である建築や街筋であろう。市当局も（企画局・教委文化課）「調査」を進めている。これによって、北九州における建築史の位置と、生活史の一面も明らかにされるであろう。

北九州市の場合、景観の点からも重視すべきは、地域特性を現わす意味において、都市形成史の主軸であった産業史と、内外交通拠点としての交通史に証しとなる、歴史的建造物の保存であろう。

前者に付ては、明治以降の大企業、工場の社屋、集会場など、当時の一流建築家の設計によるものが残されており、建築史的に北九州の特徴とされている。後者に付ては、門司港駅舎に代表されるように、鉄道関係、あるいは商社、倉庫などに地域史として残したい建造物がある。

これらは、総合的には北九州市の都市史として、都市の履歴を語り、また単に対象の建物だけでなく、その周辺環境にまで、歴史とるおいを添える景観の核ともなる。

まだ地域の隅々まで気を配れば、今日の変ぼうする都市生活の中で失われつつある、家並み、界隈、街道筋など情緒的に人のぬくもりのある景観がありそうに思われる。

## 町角の文化財

継承かー  
門司宣里

最近、町中を歩いていて町並みの日々急速な変貌に驚くと同時に、これまで続いていた善の記憶の糸がふと断ち切られたような思いになることがある。

ブルドーザーが動き回るビル建設の工事現場で、工事前には一体どんな建造物があったのか、或はどんな自然があったのか、どうしても思い出せないことがある。こうした変貌は、人々の心に宿っていた町並みの記憶や更には郷土にかかわる歴史的事実なども、やがて掻き消していつてしまうのかも知れない。

戦後しばらくしてからの高度経済成長の影響は、明治以来の第二の欧風化文明指向の世相を生み、他方では日本古来の文化や伝統といった長い歴史の中で形成され、営々と集積されてきた貴重な文化遺産も排除圧殺しかねない風潮も生みだしてきている。

ところで、北九州市は度重なる空襲を受け、建造物の大半が破壊・焼失された。それだけに今や戦前の昭和の建造物でも稀少で貴重な存在となった。しかし、都市近

代化への波はこれらを粗大ゴミ視する傾向にあることは否めない。そのことは時の流れであり仕方ないこととしても、大切なことは地域とのかかわりや由緒などによって後世に残すべきものは保存して、新旧を調和よく共存させた景観の町づくりではあるまいか。

町の開発や発展ということは、何も林立する高層ビル街化や張りめぐらされた高速道路網などを整備することはかりではない。自然保護の配慮は勿論のこと、町中に散在する有名無名にかかわらず、昔から地域の人々に身近にかかわり親しまれてきた町角や横丁の石碑・塚・祠、暗渠にされる川の橋の欄干などに至る文化的・伝統的・歴史的・民俗的な事物やこれまでの地域の発展の特色を象徴するような古きよき建造物などの保存はいうまでもない。製鉄本

事務所や門鉄会館、木屋瀬や大里の宿場町の面影を残す家並みなど一例に過ぎない。

こうしたものを大切に組み込んで後世に残していくような細かい配慮は、たとえそれがビルの谷間の小さな存在であっても、その前に立った人々の心に町の温もりと大きな感動を与えるものである。

ドイツ軍によって破壊されたヨーロッパの著名な都市は、戦後いち早く町並みを旧の如くに復元しており、又世界の文化の都といわれ

ニーには西洋人の姿が見えた。

電気会社の旧九軌が招いた、ドイツ人技師であったと云う。それから数年後、西部都府府長官將軍山元治中将が着任、この洋館が宿舎となった。代々入れかわり明治三十二年第十二師団が置かれるや師団長官舎となり森鷗外軍医部長の姿も時々見かけたと云ふ、宮内竹次郎老人の思出話。作家岩下氏の無法松が輿大将を小倉駅より人力車で運んだのもこの家が舞台と云うわけ。師団長官舎が城内、下屋敷に代り、代々持主が変わったが、戦時中、再び更に九州電力の「独身寮」となり名も「諸話寮」と云っていたがすっかり老化して荒れ果て、洋間はホコリだらけ、馬小屋もこわれ、昔の威容、今いずこの姿であったが持主の九電は釘付けにしてしまっていた。いつの間にか取りこまれて今は何もない。

またこの外に幻の建物は沢山あったが？

この記事は西日本新聞記者と共に同取材した昭和二十六年十月十七日頃のものであることを附記して置く。



るパリの町並み景観の魅力はそうした共存の配慮にあると思う。近くの太宰府市では文化財所在地周辺の建築物に対して、文化財との調和をはかるための規制条例が制定されたという。配慮を欠いた町づくりは、やがて人々に郷土愛や誇りをそう失させ郷土の歴史をも忘却させていくのである。

文化には新しいものの創造と文化・歴史遺産の保存・継承という両面の働きがあり、それはとりもなおさず「温故知新」のことばにつきる。郷土の歴史や文化遺産は、郷土の過去を写し出すいわば鏡である。その鏡を消滅させるということは、結果的には正体のわからない郷土にしてしまうということである。

地方の時代といわれるときだけに、地域の復権・再認識・連帯のために、又戦前・戦後の世代交代期にある今、改めて問い直し見直してみる時にきているのではなからうか。民族の文化や歴史遺産の保存・継承は将来にわたり、その民族に課せられた大切な営みの一つでもある。先日、日本の都市や住宅事情視察のため来日していたアメリカ人学者が、司会者の質問にこたえて「日本が無くなってしまったらいい」といったことが気になって仕方がない。

### ○ライオン亭

京町三丁目の角、今は改築されてパチンコ屋になっている。この建物が軍医部長森鷗外先生が朝夕、軍医部への往復乗馬から仰いで見た家、東京第一師団に栄転とまじった時、小倉在住の有志主催で送別宴を催した料亭「三樹」で戦後は松本清張氏の「芥川受賞祝賀会」を催した家でもある。明治三十年頃の建築で三階建、三木政吉氏が建て軍都華やかなりし頃、軍人や町政財界連中が毎夜の如く宴会を行つた料亭、洋食が主でハイカラなバター、ソース、カレー等の匂ひを香ぐさせた家、三木さんの看板娘のことが鷗外先生の日記にもある由。

三木さんがやめて日本料理の「新亀」となり又「共進亭」とも云った。大正八年森幸市さんが七千円で買取り名も「ライオン」と改めた。そして中華料理も扱った。建物が少し古臭くなったので改造しかけたところ市民から「由緒ある建物をこわすな」と故阿南哲朗さんを先頭に反対抗議、森さん遂に改築中止した話も残っている。

### ○北九州最初の写真館

小倉で始めて写真屋を開いたのは森山周造さん、元小笠原藩士、

## 昔は今あった小倉の建物

大隈岩雄



が井筒屋が買い上げて姿を消してしまつた由。

### ○早過ぎてつぶれた兵庫屋

北九州のデパートの第一号、大正七年、鳥町三丁目の角、現在の宗文堂書店の前身、赤レンガの堂々たる建物が建つた、中津商人の兵庫屋が八万円の巨費をかけて建てた。忽ち小倉名物の代表格、呉服商専門。客は下駄を預け白足袋

### ○小倉で最初の洋館

明治廿五年、人口一万人ばかりの企救郡小倉町に大ききわが起った。京町十二丁目の荒地に目も見張る「西洋館」が建つた。「九州日報（中野正剛社長）」では号外まで出したそうである。赤レンガに囲まれた北九州地方最初の洋館で二階はバルコニー付き、コルネットを奏する「天然の美」の中に完工式が行われバルコ

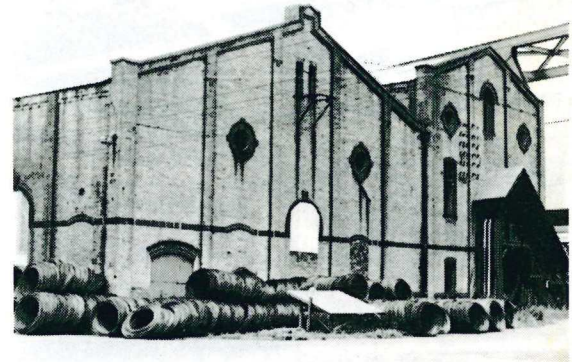




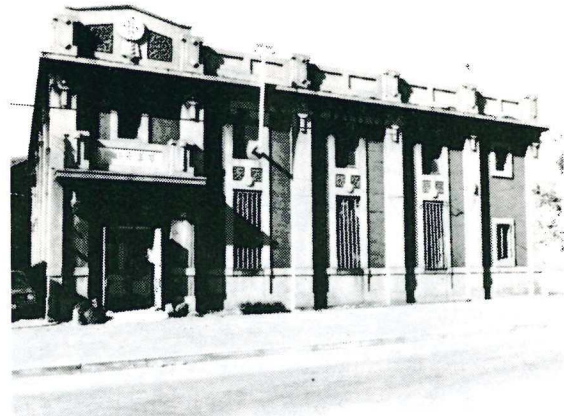
7. 商船三井ビル (旧大阪商船門司支店) 大正6年



8. 部崎燈台 明治5年 (初照)



5. 安田工業K.K.八幡工場 明治45年



6. 北九州市八幡建設事務所 (旧百三十銀行八幡支店) 大正4年



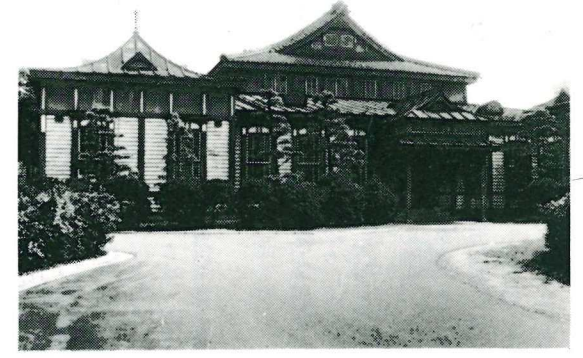
3. 若松駅舎 大正9年



4. 重要文化財 西日本工業倶楽部洋館 (旧松本健次郎邸) 明治43年上棟



1. 門司倶楽部 明治36年 (昭和45年取り壊し)



2. 明治専門学校講堂 明治42年 (昭和46年取り壊し)

# 北九州市内の洋風建築を遺そう!

西日本工業大学教授 中村 雄 三

人間は、新しいものを創りだしたときも、また、それが滅び去っていくときも異常な興奮を示すものだと思う。先年、私は百数十年ほど経た建物の取り壊しに立合ったことがある。

近年の建物解体作業は、木造・鉄筋コンクリート造を問わず機械力をフルに使うから、木造の住宅などは瞬く間に瓦礫と化してしまふ。

私の隣りで平静を装っていた主人は、いよいよ機械が一撃・二撃……と加えはじけると、たゞ呆然として涙を浮かべ話しかけても声にならなかつた。

住みなれた家を取り壊すには、それなりの理由と事情があつたのであらうが、これをつきつめて考えてみると、結局、昭和30年代後半にはじまった近代化・合理化という美名のもとに全国を吹き荒れた破壊思想のなにもでもないように思う。過去の断絶を美德と考える時代は、もはや通用しない。

建築物は、たしかに耐用年数がくると材料・構造のうえで、また生活様式の著しい変化によって更新を余儀なくされるが、ただ一時の流行病のような思想によって貴重な文化遺産を取り壊わしてしまふ。

辰野金吾は、明治専門学校の創設にあたって、建築計画を委嘱されているので、現、九州工業大学構内には、いまなお二、三の建物が残っているが、なかでも著名な建物は、同校の創設者であつた松本健次郎邸(写真4・重要文化財・西日本工業倶楽部)である。

また別表に示すように、建設年代をはじめ設計者や施工業者が不明ながらも、市内には国鉄・旧八幡製鉄をはじめ銀行・事務所・工場・倉庫などの戦前の建物で建築史のうえで、また本市形成のうえで等閑できないものを相当数のこしている。しかし、なかには戦災の被害や用途変更によって改造されたものや、また老朽化の甚しいものもあつて、いつ取り壊わされてしまふかと案ずること屢々である。

最近、またこんな風説を聞いた。いずれも国鉄所有の九州総局長官舎(写真11)と門鉄会館(表紙カラー写真)を赤字解消の一助として売却するか取り壊す意向があるというのである。

前者は明治35年加藤市太郎氏の住宅として、清水満之助(現、清水建設四代目社長)が請負つたもので、さきの西日本工業倶楽部と同じ洋折衷様式で中流階層の住宅といえる。とくに木造二階建の洋館の階段や上下階四室に設けられたマンテルピースの大理石・寄木細工・タイルなどによる装飾は当時の趣好をよく現わしている。

後者は、大正8年(一説に明治40年ともいわれる)三井物産門司倶楽部として建設されたもので、





9. 明治屋門司支店 明治42年



10. 松庫ビル (旧門司税関庁舎)



11. 国鉄九州総局長官舎 (旧加藤市太郎邸) 明治35年



12. 三井港倶楽部 明治41年

残念ながら建設年代・設計者・施工業者など一切明らかでない(最近、大正10年の折衝札を屋根裏から発見した)

木造二階建・天然スレート葺・外壁のハーフ・チンパリの木組みは太くダイナミックな構成で、正面に大小五つの切妻屋根が並んだ堂々たる建物である。

これと対照的な建物が大年田市にある三井港倶楽部(写真12・木造二階建)である。明治41年清水満之助(現清水建設四代目社長)によって建設されたものであるが、ハーフ・チンパリの木組みは軽快・華麗で門鉄会館の設計者をさぐる一つの鍵が秘められているように思う。

莊重な外観にくらべると、内部はホール周辺と階段の手摺りに荘重さがのこるが、各部屋のデザインは華麗でマンテルピースに白大理石を使っていることなどは注目したい。

二階は、大正8年(?) 国鉄所有になって以後、和室の宿泊室に改められたが、構造体や天井とは無関係であるようであるから復元は容易と考えられる。二階正面中央には、大正11年ノーベル物理学賞を受けたアインシュタイン夫妻が来日した折宿泊した部屋がほゞ当時のまゝ残されている。

要するに、この建物は、さきの西日本工業倶楽部に次ぐ貴重な洋

風木造建築であると共に、国際的な港町・門司の歴史の証人でもあるから、復元・補修を加えて是非とも地元に残存して再利用を考慮すべきと思う。

昨年来、銅板屋根の葺替えに門司区民をはじめ多くの人々の関心を惹起した門司港駅舎(大正3年建設・木造二階建)についても、またさきの西日本工業倶楽部が、去る昭和57年9月修理を終えて以後、西日本工業倶楽部のご好意で毎年春に一般公開されているが、その都度数千人の見学者が押し寄せるといふのも、ただの好気心だけでないと思う。

そこには現代の科学技術に一沫の陰りがあったこと、特に現代建築の素材であるコンクリートの耐久性が「神話」になりつゝあるとき、これら過去の建築を顧みることによって、明日の建築の正しいあり方を知ろうとする熱意と、郷土の文化遺産を大切に守って、次代へ残そうとする真剣な態度の発露にはかならないと確信している。(昭和59年6月)



# 八幡西区の古い家々

能美安男

## 1. はじめに

昭和五八年一〇月現在の八幡西区の世帯数は八〇六四九、前年同期に比して二六九世帯の減。人口は五三〇人増であるが、世帯数は初めて減少している。元禄期、及び、明治初・中期の記録されている戸数は表の通りである。世帯数との比較であり、殊に元禄期の数は一部を欠いているが、その現在に占める比は表に示す通り極めて低い。明治二年当時の家が全戸残っていたとしても四%に充たない。それでさえ九九%は失われていると思われ。

## 2. 農村部

八幡西区にも、部分的に改造されてはいるが、藩政時代の家屋や明治初期の家屋を散見することができる。しかし、その数は極めて少ない。殊に、戦前には多く見ることができた萱葺や藁葺の家は、

八幡西区の戸数又は世帯数

年	元禄期	明治初期	明治22年	昭和58年
村				
木野	208	350	362	951
野面	210	111	139	682
田剛	27	52	54	306
金楠	41	65	79	860
橋月	69	171	342	3541
香馬	153	189	230	2980
場山	64	63	73	1699
畑	25	79	76	78
小嶺	16	42	38	1463
上津	110	124	126	3749
下津	30	80	82	5341
市瀬	19	41	41	1067
引野	66	109	85	5526
穴生	58	87	71	5352
犬丸	72	79	99	5961
折松	52	74	71	1944
浅尾	42	87	88	7236
本川	58	76	65	2354
陣城	68	251	258	11538
熊原	-	75	83	2006
藤手	108	237	189	8410
藤水	53	153	328	5924
鳴水		34	27	1681
計	1,549	2,629	3,006	80,649
80649除(%)	1.92	3.26	3.73	100

「田園志」(香江文庫)、『福岡県史資料』Ⅱ、同Ⅰ、『北九州市の人口』(北九州市統計課)より作製

以前の家屋を散見することができた。風雪に耐え、明治六年の一揆にも破壊を免れたものである。近年その大半は失われつつある。生活様式の近代化と、急速な車社会化がそれに拍車をかけている。昨年、八幡西区小嶺で、二〇〇年近くを経た家屋が解体された。主要な木材は全く強度を失っていない。古い家屋の減少は必ずしも耐用年限の到来とは限らない。

この外にも藩政時代に庄屋経験者の居宅は本城や穴生にも見ることができ、これ等の家屋は生活様式の変化に伴い、部分的な改造は行われているが、往時の面影は留めておける。庄屋級宅以外でも、旧筑前東部地方の住宅の様式を残す家屋を小嶺・楠橋・野面などに見ることが出来る。香月地区には炭坑主や関係者の居宅が現存しており、石炭産業の盛時を偲ばせるものがある。

藩政時代には、宿駅など特定の所以外では商業は制限されていたので、黒崎・木屋瀬以外には商家は少ない。主なものに、醸造業・絞織業・質屋・製菓業・医師などの家屋があったが、殆どが改廃されている。

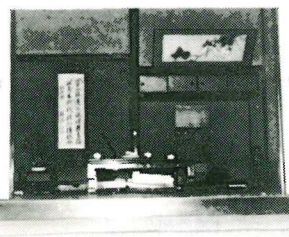
## 3. 宿駅と長崎街道筋

戦前までは、旧長崎街道の宿駅である黒崎と木屋瀬の間には明治初期以前の建築と思われる建物も点在したが、現在では極めて稀となっている。

旧黒崎宿の内、田町・藤田の部分は天保一年(一八四〇)二月の大火により殆ど焼失したのでそれより古いものはない。田町二丁目には旧前の家並を見ることができたが、近年殆どが失われつつある。藤田電停前の旧桜屋旅館は大正期の建物であるが、奥の二間は旧前を偲ばせている。熊手部分でも僅かに岡田宮前の蛭子堂綿屋が外観を残している。

割子川は藩政期には家はない。上の原にあった滝井医院は天保期には既にあるが、建物は戦前に比しても改造されている。上の原・町上津役の作出には旧態はない。

上石坂の頂上に、大銀杏で知られる旧建場茶屋S氏邸がある。現在の建物は文化元年(一八〇四)



銀杏屋敷 上段の間

一月一七日に着工、翌年二月一日棟上が行われている。同家には記録・図面ともに残っており、諸大名等が休息した建場茶屋の様子をよく示している。居住者の問題はありますが、是非保存対策が望まれる。

下石坂・茶屋原・真名子の作出は藩政時代以来存在したが、旧態は殆ど失われている。

木屋瀬には、数度の災害にも拘らず、旧態を残す建物が点在する。間口三間半の旧規制は奥行の深い佇まいを生じ、今もその名残を留めている。藩政時代には米場の船場が存在したこともあり、舟板の壁も散見出来たが、今は鉄板に覆われて了っている。西溝口近くに残っていた鋸の歯状の家並も見られる影もなくなりつつある。それでもまだ旧宿駅の風情を残している。

古い建物も残っている。保存対策が望まれる。永源寺の横門は旧本陣の門という。板は張り替えられているが、軒先丸瓦には黒田家の定紋藤巴を見ることが出来る。

山家の薩摩屋が壊された今日、六宿筋では唯一のものである。油屋U氏邸は藩政期の商家で、明治六年の一揆にも難を免れた旧家。往時の面影を残している。下代屋敷の倉もある。現在は使用されておらず藁で覆われている。作家故伊馬春部氏の生家は改盛町公民館となっている。